

技術士第一次試験に合格して



青木 信成
(あおき のぶなり)

勤務先

株式会社 日立産機システム
北海道支社

〒063-0814 札幌市西区琴似4条1丁目1-30
TEL 011-611-1224 FAX 011-611-8433
E-mail aoki-nobunari@hitachi-ies.co.jp

■ 専門：機械部門

1. 自己紹介

群馬県出身、生後半世紀と少々経過しています。

学生時代は長野県で過ごし、卒業後今の会社の前身である神奈川県の子会社に入社しました。

入社後最初の4年間空気圧縮機の設計開発に従事した後、5年目に営業部門に異動と同時に北海道に転勤して来ました。以来四半世紀道内で空気圧縮機を売り歩き今日に至っています。工学部 機械工学科卒、自称機械屋です。

2. 受験に至るまで

技術士という資格を知ったのは北海道に来て早々でした。存在を知って一度は受験を考えましたが、その時点で二次試験を直接受験するには実務経験が不足しており、「そのうちに…」とと思っているうちに白髪が増え、眼は遠くなって、いつしか技術士を目指したことを忘れかけていました。

四十代半ばから最近まで会社要請に応じる形で資格試験(それも電気系…)にチャレンジしており、「技術士」まで考える余裕がなかったというのもあったと思います(言い訳です…)。資格試験から開放されたのは2008年(平成21年)2月でした。

ところが、もう試験を受けなくてもよいとなつたとたんに、「技術士」という言葉が浮かんでくるから不思議なものです。忘れたつもりでしたが心のどこかで意識し続けていたのでしょう。

一度は受験しようとした自分を思い出すと、今は皆一次試験からのチャレンジということも手伝って改めて技術士試験に挑戦しよう決めました。

3. 受験体験

いざ試験勉強を始めると、基礎・専門両科目では、早々にどの分野も知識が穴だらけという現実と直面しました。現役のつもりでいたのですが、ブランクは無視できませんでした。一次試験だけなら過去問を解きまくって対応可能とも考えたのですが、後々を考え基礎からやり直すことに決めました。

卒業後も後生大事に持っていた学生時代の教科書は活字が小さくて再活用を断念し、買いなおしました。(今の参考書は活字が大きくて行間が広く、老眼世代にはありがたかったです。)

参考書の頁をめくるたびに次々と出現する穴を塞ぐ作業を続けると、昔わからなかったものが今になってわかったとか、あやふやだった知識の裏付けが取れたとかの効用もありました。試験勉強を通じて知識の棚卸しの効果もあったと思います。

適正科目は、試験というよりも「技術者」について改めて考える機会と捉え、「コンプライアンス」や「技術者倫理」に関連する文献を読んで対処しました。

奮闘(?)の甲斐あって、一人目の女神様の前髪は掴む事ができたようです。

4. 今後に向けて

当面の目標は当然のことながら二次試験突破です。営業部門に在籍しながら受験するというのは稀少例らしいので、何としても二次試験突破を果たし、その気になれば営業の人間でも技術士になれるという一例になりたいと思っています。

二次試験突破の暁には、技術士として機械技術に馴染みの無い方々に親しみを持ってもらえるような活動が出来ればよいと考えています。



伊東 博美

(いとう ひろみ)

勤務先

株式会社 消費経済研究所 ダイエー品質管理センター
北海道エリア食品担当

〒063-0801 札幌市西区二十四軒1条1丁目1-12

TEL : 011-691-2236

■ 専門：農業部門

1. 自己紹介

私は登別市で生まれ育ち、高校は室蘭へ通いました。海の近くの高校だったので、通学のバスの中やグラウンドからはいつも海が見える環境でした。

大学ではとりあえず津軽海峡を越えて道外の農学部農芸化学科へ進学しました。受験のときは単純に「生物と化学の勉強ができる学科」という基準で志望大学を選んだのですが、選んだ大学が伝統的に「実学」に重きを置いていたため、大学の必修科目の中に「農学概論・実習」がありました。

その授業で、農学の研究が農業技術を発展させ食料生産効率を向上させてきた歴史と内容について体験を通して学ぶことができました。先生の「これからどんな道に進んだとしても君たちは卒業したら農学士なのだから、農業を知らない農学士であってはいけない。」という言葉がとても印象に残っています。

卒業した後は食品会社に就職し、レトルト食品の製造工場ライン試作のための業務を担当しました。

その後、高校時代に海を見ながら思っていた「この向こうに行ってみよう」という思いが津軽海峡越えでは満足できなくなり、太平洋を越え青年海外協力隊員として南米アンデスの小さな村で加工食品の工場を立ち上げ製造するプロジェクトに2年間参加しました。

カルチャーショックエピソードはいろいろあるのですが、一番驚いたことは日本やアメリカ合衆国の常識がグローバルではなかったことです。

食品業界ではあたりまえだと思っていた「一般衛生」が「一般」ではありませんでした。それは教育の不足だけではなく価値観の違いも影響していると思います。

私がアンデスの山中にいる間に日本ではカイワレのO-157事件が起こり、その頃すでに感覚が南米化していた私は、テレビのニュースで大騒ぎしている日本人を不思議な感覚で見っていました。日本では

製造者、販売者責任は問われても消費者責任は問題視されません。南米では作る人も売る人も買う人も、それぞれが自分の行為に対して責任を持ちます。

帰国して数年間は食品業界を離れていましたが、5年前に今の会社に採用となりました。

今はダイエー品質管理センターへ出向し、流通業の品質管理担当者として幅広く食品の品質管理業務を担当しています。

2. 今後に向けて

残念ながら、食品業界では技術士の知名度は低く、二次試験に合格できたとしても、その資格をどうやって会社への貢献に具体的に生かせるのか、今は思いつくことができません。

しかし受験勉強や技術士会北海道支部の会員の皆様との交流の中から得るものは多く、そういった環境に身を置くことで自分自身を成長させ、業務内容を今後よりレベルアップさせていくつもりです。

また、一次試験合格を直属の上司に報告したところ「その資格について、自分とその上司や総務人事にも説明しよう」と言われ、社内という限定的な範囲ですが技術士の認知度向上に貢献できたと思っています。

二次試験は農芸化学分野で受験するつもりですが、受験対策の参考書はほとんどが建設部門の内容で、どんな受験対策をとったら良いのか手探りの状態です。

技術士会北海道支部の諸先輩に相談したところ、農芸化学分野の方は多くはないとのことでした。しかし、分野が違って共通している事項については的確に教えていただき、また多くの諸先輩をご紹介いただき、とても感謝しております。ありがとうございます。

多くの方の後押しにお応えできるよう、努力していきます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



武田 旨弘

(たけだ よしひろ)

勤務先

株式会社 日興ジオテック

業務部環境開発課

〒070-8012 北海道旭川市神居2条18丁目2番12号

TEL 0166-61-3491 FAX 0166-61-2597

E-mail takeda@nikko-inc.co.jp

■ 専門：環境部門

1. 自己紹介

(1) 自転車と私

私は学生時代にサイクリング部に属しました。自転車(ランドナー)にテントや寝袋を積み、全国を巡りました。北海道も2度訪れ、道内各地を走りました。既に、10年以上昔のことになってしまいましたが、奥尻島から見た夕日、カムイワッカ、標津町からの国後島は、今でも心に残ります。

(2) 環境とのかかわり

1987年にNHKで放映された「地球大紀行」が、当時小学生だった私に、地球の神秘や環境問題に興味を持つきっかけを与えてくれました。その後、学生時代から排水処理技術の研究を始め、社会人時代も約10年、その分野の研究開発に携わりました。現在は、より自然環境に近い、分析・調査の重要性を感じ、計量証明事業所において、環境調査業務に携わっています。

(3) 旭川

私は、大阪で生まれ育ち、社会人になってからも東京・大阪といった都市部で生活してきたため、都市部での生活しか知りませんでした。

しかし、現在は、縁があって旭川に在住しています。旭岳から十勝岳にかけての雄大な山容、豊かな雪解け水を湛える河川。家から10分も走れば自然があり、大変恵まれた都市だと思えます。また、旭川の人々が、自然とうまく付き合っていることにも感心する毎日です。

2. 技術士

(1) 受験までの経緯

私が技術士の存在を知ったのは、社会人2年目のときでした。当時、技術士を目指していた先輩か

ら、技術系資格の最高峰である技術士の凄さを聞き、「この資格だけは受験しないでおこう」と弱気になった覚えがあります。そんな私ですが、現在では、様々な都合上、技術士を目指すことになり、30歳を過ぎてから初受験することになりました。

(2) 1次試験を受験して

出願したものの、技術士の試験範囲は広く、どのように勉強すべきか悩みました。しばらく間、時間を無駄に過ごしましたが、あるとき、強い見方を見つけました。それは「環境白書」です。本屋で見かけた白書。白書と聞いただけで、何だか難しく遠い存在でしたが、実際に手にとってみると、ポイントがまとめられており読みやすい。早速購入し、時間をかけてじっくり読み込みました。すっかり白書好きになった私は、環境省が主催する「白書を読む会」(札幌円山動物園で開催)にも参加しました。その甲斐あってか、環境部門の合格率が13.5%と低かったにもかかわらず、合格することができました。「環境白書」とは、今後も付き合いたいと思います。

3. 今後に向けて

私はこれまで、資格取得を、日々の勉強のきっかけづくりおよび目標設定に利用してきました。技術士試験は、専門内外問わず、多くの知識を深く習得するためには最適と考えます。また、文章を書くことは、自分の意見を他人に伝える基本動作ですから重要です。今後も、2次試験合格を目標にして、日々の努力を継続したいと思います。

最後に、技術士として相応しい技術者になれるよう、技術士の方々の考え方やプロジェクトの進め方に接していきたいと思えます。よろしく願いいたします。



三宅 絵理

(みやけ えり)

勤務先

株式会社 エル技術コンサルタント

環境開発部

〒060-0005 北海道札幌市中央区北5条西12丁目2番地

TEL 011-261-0931 FAX 011-261-0940

E-mail miyake@l-tech.co.jp

■ 専門：生物工学部門

1. 自己紹介

私は、北広島市で生まれ、自然や環境問題に興味を持ち、北海道大学水産学部に入學しました。その後、同大学の大学院修士課程に進みました。大学では、乗船実習や森林実習を通して、自然と触れ合う貴重な体験をしました。研究テーマは、「南極湖沼の微生物群集構造解析」というタイトルで、大学4年生から大学院2年生までの3年間取り組みました。実際に南極に行ったわけではなく、南極観測隊の方たちが採取していただいた水試料を、研究室でひたすら解析(主にDNA解析)していました。国立極地研究所の学会にも参加し、他大学の研究者の研究に対する熱意には大変刺激を受けました。

将来を考えたときに、研究者になるか企業に就職するか迷いましたが、自分は、環境調査を行う技術職を通して社会に貢献したい、と考え、就職活動を始めました。就職活動の中で現在の会社に出会い、採用していただきました。現在は、振動・騒音調査に携わりながら、他の環境に関わる分野も勉強しているところです。

2. 受験体験

技術士の資格については、恥ずかしながら会社に入って初めて知りました。入社2年目になって上司から受けるようすすめられ、2回目に合格しました。専門分野については、上司から一次試験は受かりやすい分野を挑戦したらどうか、というアドバイスを受けて、大学時代に学んだ専門分野に最も近い生物工学部門を受験しました。

勉強方法としては、3年分の過去問題と予想問題

の買った問題集を繰り返し解きました。わからない問題があれば、その都度、高校・大学時代の教科書やインターネットを活用して覚えていきました。特に、専門科目は大学の知識だけでは2割程度しか解けず、少なからずショックでしたが、「聞いたことがある」程度の知識を、より深く身につけることができたと思います。

1回目の受験は、問題すべてを完璧にしようとして、やりきれずに本番を迎えて不合格でした。しかし、一次試験は選択問題なのだから、と割り切り、2回目の受験は思い切って、問題の8割を完璧にすることを目標にして試験に臨んだところ、無事合格することができました。

3. 今後に向けて

今回、試験には合格しましたが、技術士になるためには、受験勉強はもちろんのこと、その他には、以下の2点について努力していこうと思っています。

1つ目は、知識を身につけるだけでなく、技術として考え、実践的な発想ができるようになることです。知識を得ただけで満足してしまい、「じゃあ、それで何が言えるのか」「それを使って何ができるか」という発想に乏しいのが歯がゆい現状です。

2つ目は、自分の専門分野以外にも積極的に目を向けていく、ということです。一次試験合格者歓迎会で、様々な分野の方と話す機会をいただき、以前よりも少し幅が広がりました。今後も、人と接する機会や、新聞や雑誌等を通して、研鑽を積んでいきたいと思っています。